英国社会にみるライフ・ワークバランス

ロンドン大学キングス・カレッジ医学部地域医療教育部門
特別研究員　武田裕子

“午後 3 時に学校に子供をお迎えに来るイギリスのお父さんは、どんな仕事をしているのかなぁ。”私と小学 2 年生（当時）の娘は、2010 年にロンドンで留学生活を開始した。大学で地域医療教育に従事していた私は、途上国や後紛争国の国際協力で活動した経験から、住民がイニシアティブをとって活動するプライマリ・ヘルスケアが、日本の地域医療の発展に不可欠だと感じるようになっていた。そして、その概念的枠組みを基礎からしっかり学ぼうと、20 年ぶりに学生に戻って学ぶ決断をしたのだった。同時にそれは、家事・育児の一切を母に任せていた私が、初めて子供と向かい合い、家庭内の仕事を担当する 3 年間の始まりとなった。

夫は日本の大学病院の救急部門に勤務し、病院に寝泊まりすることの多い多忙な毎日を送っていた。私も、英国留学までは大学教員として勤務し、夕食までに帰宅することはまれで、日中の業務が終わった後、深夜まで研究を続け依頼された原稿を書く日々であった。親の帰宅を待ちわびて眠れない娘が、いつ帰るのかと 11 時頃に携帯に電話をかけてきて、まだ寝ていなかったのかと慌てて飛び帰ることも幾度かあった。そうした仕事優先の生活が可能であったのは、実家の母が、孫の世話のために同居を開始し、一切の家事を引き受けてくれていたからであった。私の仕事ぶりは、結婚後も子供の誕生後もまったく変わらなかった。

そのような生活が 8 年ほど続き、私はロンドン大学衛生・熱帯医学大学院修士課程に入学、子供は、学生宿舎に近いモンテッソリー式の私立小学校 3 年生に編入した。小学校は、午前 8 時 45 分に始まり午後 3 時半に終わるという時間割であった。私の大学院の講義は、午前 9 時半から午後 5 時。しかし幸いなことに、その小学校では、午前 8 時からブレックファスト・クラブ、放課後は午後 6 時までアフタースクール・クラブという、日本でいう学童保育のようなプログラムが設けられていた。こどもを小学校に送り届けて、自転車で大学院に向かい、授業終了後にまた自転車を走らせるという、文字通り自転車操業の毎日であった。一方、子供の小学校では午後 3 時半に帰宅する同級生も多く、しかも父親が迎えにくることが珍しくないため、冒頭の発言となったのである。

英国の小学校には 4 歳から 11 歳の子供たちが通学しており、保護者による送迎が義務となっている。驚いたことに、朝の通学風景をみていると、半数は父親に連れられて登校している。毎週、金曜日は午前 9 時半まで学校参観があり、ほかにも音楽会や学習成果発表会、学芸会、チャリティ・バザーなどの学校行事が目白押しで、月に数回は親が学校に行く機会があるのだが、これにも実に多くの父親が参加している。話を聞くと、建築家や弁護士、企業経営者、コンサルタント、銀行家、研究者と様々な分野で活躍する方たちである。ご自宅にお招きいただくこともあるが、ゲストに飲み物を勧めたり、給仕するのはおもに父親の役割で、料理もお父さんが腕を振るうご家庭も少なくない。しかもそれを心から楽しんでいるように見受けられる。普段に道を歩いていても、ベビーカーを押す男性や、子供の手を引いて公園に向かう父親に当たり前のように出会うので、子供の小学校のお父さん方が特別ということではなさそうだ。

あまりの違いに、英国人が特殊なのかと思いきや、そうでもないことが段々に分かってきた。私は、ロンドン市内の大学院留学生向けの宿舎に入居したのだが、そこには、90 か国から約 700 名の学生が暮

らしている。子供のいる家庭も 35 家族あり、ペアレンツ・クラブ（親の会）というコミュニティを形成し助け合っている。子供たちのためのイベントを共同で企画したり、互いに時間を融通しあって子供を預かったりするのだが、そこで目にするのも、かいがいしく子供の世話をして家事をこなす父親の姿であった。赤ちゃんが生まれたばかりのご家庭に、交代で食事の差し入れを行ったり、買い物を代行するという活動をペアレンツ・クラブで行っているが、男性も積極的に参加している。妻の大学院留学に合わせて、育児休暇を取って渡英した男性もいれば、海を越えた在宅勤務の形態で、インターネットを駆使して本国の仕事を続ける男性もいる。妻が学会発表のために家を空けるときは、夫が子供の世話を一手に引き受ける。ご夫妻とも大学院生として忙しいご家庭では、保育園利用に加えて子供の世話をするナニーさんを雇い、家の掃除はハウス・キーパーに時給 3000 円ほど払って外注している。私も、試験前など一分一秒でも惜しい時には、アルバイトの方を探して子供の学校への送迎を依頼し、夕食は有機野菜のこだわりレストランにお願いして日替わり弁当をつくってもらい時間を捻出した。掃除や洗濯などの家事は自分でやるべきことという思いが強く、お金を払ってお願いするのには抵抗があった。しかし、20 年前の米国留学中にも、同僚が意味ある時間を家族と過ごすための投資だと話していたことを思い出す。他に利用できるリソースがなければ、有用な選択肢となるであろう。

日本では、女性の就業率は、出産・育児のために 20 歳代から低下し続け、30 歳代半ば以降にようやく回復に転じるという M 字カーブを描いている。女性医師も例外ではなく、統計によると就業率は約 75%にまで低下し、医師不足に悩む日本では大きな課題となっている。この M 字カーブ、英国をはじめとする欧米諸国ではそれほど顕著ではない。育児支援など、働く女性へのサポートがよほど整っているのだろうと想像して渡英したが、実際には、まったくそんなことはなかった。国営放送 BBC の特集で高額な保育所利用料が取り上げられるなど、むしろ、育児支援の欠如が社会問題として認識されている。常勤職を続けるために保育園を利用すると、給与の約 2/3 は保育費に消えるのだという。自宅近くの保育園に入れない待機児童も存在する。産前産後の有給休暇は日本ほど手厚くない。女性の同級生の間でワーク・ライフバランスが話題になった時、ナイジェリア出身の眼科医の女性は、“バランスなんて取れるはずがない。ひたすらジャグル（やり繰り）するのみ。”ときっぱり。複数のものを同時に空中に投げ続けるジャグリングという曲芸があるが、そのイメージなのだという。私も、小学生の子供と初めて二人きりで暮らして、子育てというのはそれだけでフル・タイムの仕事であることを実感した。それでは、なぜ、30 歳前後の女性医師の就業率低下が英国では起こらないのだろうか？

英国のご家庭の様子を垣間見、また、大学院修了後に研究職としてロンドンの大学に勤務した経験をもとに考えると、それは、上述のような“家庭内男女共同参画”と家事の外注に加え、家庭生活を最優先事項として仕事以外の自分の時間を大切にする生き方に行きつくように思える。私の職場では、午後 5 時を過ぎると人気がなくなる。子供の急な発熱などで休まざるを得ないという連絡があったときには、心配して無理に出てこないようにと伝えられる。そのために、休んだ職員が担当する仕事が滞っても、それは仕方がないことだと互いに納得している。有給休暇が最低 4 週間、立場によって 6 週間あり、皆、必ず取得する。その間、緊急事態をカバーする体制はあるが、基本的には単に仕事がストップするのみで、誰かの負担が増えることがないよう考えられている。

病院で病棟業務が忙しいのは英国も同じだが、ほとんどシフト制をとっていて、時間が来ると次のチームと入れ替わる。出産のために入院した知人が、もう少しで生まれるというときに担当者が交代になって驚いたといっていた。勤務形態もかなり多様である。例えば、遠方から通勤している教員が “事務

的な仕事がたまってきたから”と、一日を自宅勤務に切り替えて効率よく作業するという選択肢が与えられている。また、週に数日、診療所で臨床医として勤務し、研究や教育のために大学教員としても数日勤務するという働き方をする医師もいる。自分の興味にしたがって非常勤の仕事を組み合わせる働き方を“ポートフォリオ・キャリア”というのだそうだ。ポートフォリオ・キャリアであれば、週に 1 日の育児日を含めることも可能だ。非常勤であっても常勤であっても勤務日数が異なるだけで、能力に応じて重要な仕事が割り当てられ、キャリアの中断とはみなされない。

子供の通う小学校の夏休みは 8 週間ほどあるが、同級生のご家庭の多くが家族で数週間からときに 5 週間もの長期旅行に出かけるという。法廷弁護士をなさっているお母さんは、“自分は独立しているので休暇を取ればそれだけ収入が減るけれど、自分の人生を豊かにするための選択だ”と言われていた。銀行員の友人は、“必ず 5 週間続けて休むことになっていて、その間、他の職員が自分の仕事をすっかり引き継ぐことになるが、これが行員の不正行為防止に役立っている”とのこと。

一方、こうした“ゆるい”働き方が影響しているのか、サービスを利用する側が、担当者不在を理由に延々と待たされるのは日常茶飯事である。日本人留学生が集まると、こんなに休暇を取ってばかりの国が、どうして国として成り立つのか不思議だという話題に必ずなる。首都の地下鉄が信号機故障で止まったり、バスに乗った後で行先が突然変更になることがあるし、郵便物が行方不明になったり、事務手続きが漏れることもよくある。非効率で不便であり、自分たちがしっかりフォローしないとひどい目に遭うという愚痴で盛り上がる。しかし、たいてい最後には、どうして日本ではあんなに非人間的な働き方が求められるのか、本当にあれは必要なのか、やり過ぎかもしれないという反省で終わる。

確かに、一時帰国して接する日本社会は、隅々まできちんとしている。夜遅い時間であっても仕事のメールにすぐ返信がくるし、期待通りに物事が運ぶ。日本は快適で住みやすいと、これも日本人留学生の一致した意見である。しかしながら、心や身体を病むほど過酷な勤務状況があるのも事実である。英国のような働き方をするだけで、うつ病や自殺予防対策になるのではないかと WHO に勤務していた精神科医の友人が真面目に話していた。医師不足状況が続く医療現場でも長時間労働は当たり前で、いつでも呼び出しに応じる医師が尊敬され信頼される面があることも否めない。職場に迷惑をかけるので妊娠したことを打ち明けられない、とつらそうに語っていた若い研修医の姿が思い浮かぶ。当直免除で保育園のお迎えに間にあう勤務にしてもらったけれど、責められているようで肩身が狭いと打ち明けてくれた女性医師もいる。ある男性医師は、医師の仕事と育児を両立している妻は皆のロール・モデルといわれるが、家事育児を手伝う夫の自分は不甲斐ないやつというレッテルを貼られると嘆いていた。シフト制で勤務しているはずの看護師が、シフト終了後いつまでも病棟に残って記録をつける姿もよくみかける。

ワーク・ライフバランスは、本人の心がけや努力、工夫だけで得られるものではない。また、育児支援や女性医師の勤務環境への配慮があれば、それですべてが解決するというものでもない。配偶者の協力は不可欠だが、男性の家事・育児への参加を当然と考える社会でなければ実行には困難が伴うであろう。長時間勤務や深夜までおよぶ残業は、“家庭内男女共同参画”の障壁となっている。医療現場では、一人の医師が主治医としてあらゆる対応をする診療体制から、チームを組んで複数の医師で協力し合う体制や、シフト制を導入するには、患者・家族の理解が得られることが前提となる。3 年間、英国社会のなかで暮らしてみて、医療制度も社会の仕組みも、その国の歴史や文化のなかで形作られるものであることを実感した。女性の就業率の M 字カーブがアジア諸国に顕著であるという事実からも、女性の役割

に対する社会規範の違いが表れていると読み取れる。そう考えると、現状が大きく変わるには、まだ少し時間がかかりそうである。日本人の勤勉さや仕事への誠実な態度、きめ細やかな心配りなどを失わずに、誰にとっても働きやすい、生きやすい社会をつくりあげていくためには、制度整備に加えて、社会の構成員がそれぞれに自分たちの働き方を見直す必要がある。

英国医学部では、1991 年以降、女性が入学者の半数を超えており、2017 年には医師の半数以上が女性になると報告されている。英国の医師のほとんどは、National Health System (NHS)という国営医療制度で運営される医療機関に勤務している。NHS によると、全女性医師の 43%が 35 歳以下であり、その多くが、妊娠・出産を今後予定しているため、それを前提に医師の勤務形態を再考する計画であるという。女性にとって働きやすい職場は、男性にとっても働きやすい。日本でも、女性医師の増加がきっかけとなり、女性医師支援にとどまらず、医師の働き方、ひいては医療サービス提供のあり方にも議論が及ぶことを期待する。医師が心身ともによい状態で診療に臨むのは、安全・安心の医療の第一歩である。また、子育て中の医師が生活者の視点をもって診療することで、多様な価値観が導入され、患者に寄り添う医療の提供につながるのではないだろうか。「イクメン・ドクター」の増加は、社会的にもインパクトを与える可能性があると考える。

私自身は 3 年間の英国生活の中で、親として成長したとは自信をもって言い難い。しかし、子供がいたからこそ、地域の活動に参加し、英国社会の姿に直接触れる機会を得た。また、小学校教育を垣間見ることで英国における人材育成について考えることができた。さらに、宿舎に置いてペアレンツ・クラブ（親の会）の運営に携わり、互いに支え合うコミュニティの力を感じることとなった。これらは、今後の地域医療活動を考えるうえで、非常に貴重な体験であった。加えて、子供と一緒に始めた乗馬は、初めて真剣にフィットネスに取り組む動機づけとなった。私にとっては、子育てのためにライフ・ワークバランスが必要であったというよりも、子供の存在がライフ・ワークバランスを生み出してくれたといえる。後に続く後輩ドクターたちにも、パーソナル・ライフの充実を図るなかで社会とのかかわりをもち、医療に取り組んでほしいと思う。自分の体験をこうして発信し、諸外国の情報提供を行うなどして、そのためのサポートを一部でも担えたら嬉しい。